

加賀象眼

加澤美照工房

加澤美照工房は、金沢に昔からある伝統工芸の1つである、加賀象眼と江戸彫金の製造を行っている。

加賀象眼は、1600年代、加賀藩の3代将軍前田利常の命により日本全国から職人が集められ、その後独自に発達していった。

現在、象眼産地と言えるのは、加賀象眼、京都の京象眼、熊本の肥後象眼の3つのみである。

加澤美照工房では、加賀象眼の体験が可能である。ベースプレートと呼ばれる台にもん金という金属を象眼していく。

ベースプレートの穴の横壁は、まっすぐ立っている。もん金を入れたときにはずれないように底をアリ鑿で広げる作業をアリ立てと言う。アリ鑿は、横から見ると、少し下にカーブした形をしていて、それを穴の底にあて、上から金槌でたたくと、底が少しへこむ。穴の形にそって少しずつずらしながら1周したら、もん金をアリ立てした穴に入れ、ならし鑿でもん金を埋め込む。もん金のふちより少し内側にならし鑿の平らな底をあて、上から金槌でたたきながら、外側へとならず。ベースプレートはたたくとへこんでしまうので、たたかないこと。すき間がないようにならしたら、ベースプレートから上にでていゝもん金をやすりでけずる。平らになってもけずっていると、もん金より柔らかいベースプレートがけずれてくるので、注意。その後、サンドペーパーで細かな傷をとり、つやだしをし、完成だ。

体験では、アリ立ての工程から始めるが、加澤美照工房では、先にベースプレートを切り、穴を開けなければならないので、とても時間がかかる。

加澤美照工房では、茶道具や香道具の他、アクセサリもとりあつかっている。最初は、職人さんの趣味で制作していたのだが、需要があり、誰でも手にとれるものと思い、販売を開始した。

江戸彫金は、金属の板などをのこぎり、金槌、鑿、ペンチなど様々な工具を使い、切ったり曲げたり延ばしたり叩いたり繋げたり貼り合わせたりしてつくる工芸作品だ。

加澤美照工房の江戸彫金の作品は、金沢駅の新幹線ホームの待合室にかざられている。飛んでいる朱鷺のデザインだ。構想から完成に至るまで、1年程度かかる、大作だ。興味のある人は、見に行ってみてはいかがだろうか。

加澤美照工房では、箆笥の引き手などの金具も江戸彫金で制作している。
金沢の伝統工芸である、加賀象眼の制作、販売に加え、体験もでき、江戸彫金の制作、販売も行う店、加澤美照工房。金沢をおとずれた際には、ぜひ一度行ってみたいはいかがだろうか。

小学生がただ事実を書いただけのつたない説明、閲覧ありがとうございました。